

# 性をパフォーマンスする

——「トランスジェンダー」へのインタビューから——

岩田(井上)未来

## 〔抄 録〕

トランスジェンダーについて、近年「性同一性障害」という診断名によって説明がなされるようになった。その治療は、「彼らは心と体の性別が食い違い、心の性を強制することは不可能なので、体の性を変えて男女どちらかに一致させる」というものである。

しかし「トランスジェンダー」として自己表明する人々の語りを詳細に見ていけば、「女」と「男」の二元論では語り得ない人々の存在が明らかになる。トランスジェンダーは性別を移行するだけでなく、性別を乗り越え、否定し、無化し、攪乱する可能性を秘めている。

性別が一貫した本質的なものとして捉えられる理由について、Sedgwick のホモソーシャル理論から解釈した。すなわち男性中心社会によって、性の自然性についての言説は支えられていると考えられる。故に「心にも性がある」とする主張もまた、男性中心社会の性別規範に則ったパフォーマンスである。

キーワード トランスジェンダー、性別二元論、男性中心社会、インタビュー

## 凡例

1. 論文からの引用は「     」で本文に挿入される。
2. 論文以外のエッセイ、自伝、サークル機関誌、ミニコミ誌、パンフレットなどからの引用も同様である。本論文では当事者の語りの一部として、これらを分析データとして用いる。
3. インタビューによって筆者が得たデータは、2 字分の字下げとイタリック体によって表記される。

## 1. はじめに

トランスジェンダー (Transgender, TG) とは、男女二元論を前提とした社会において、ひとつのジェンダー (性別) からもうひとつのジェンダー (性別) へトランスする (移行する)

人々として理解される。しかしこの言葉が使われるようになってからまだ30年ほどしか経っていない。類似の言葉として古くからあるのが「トランスセクシュアル (Transsexual, TS)」である。性科学者である Harry Benjamin が1953年に学会で定義付けを行って以来使用されており(松尾 1997),「性転換症」とも訳される。これはジェンダーアイデンティティ (gender identity) が性器を含む身体的性別と反対であり, 自己の性認識に性器の形状を合わせるために外科手術を望む人々を指す。そして医学が彼らに関与するために,「性同一性障害 (Gender Identity Disorder, GID)」という診断名が確立された。

しかしジェンダーアイデンティティのあり方は様々である。どの医療的処置を望むか, また医療的処置が必要かどうかは, 人それぞれである。こうした医療を必要としない当事者, もしくは診断によって医療的処置から外された当事者が, 自身の主体性を表現するために,「トランスジェンダリスト (Transgenderist)」という言葉を生み出した(米沢編 2003)。

現在, どのような形であれ性別を移行しようとする人々を包括的に指す言葉として「トランスジェンダー」が用いられる。ただし狭義の意味として, トランスセクシュアルでもトランスヴェスタイト<sup>(1)</sup>でもない人々, つまりジェンダーアイデンティティは身体の性と反対の性であるが, 医療的処置は望まない人々を指す言葉としても用いられる<sup>(2)</sup>。

こうしたトランスジェンダーについての学術的研究は, 文化人類学, 社会学, 精神医学, 脳生理学等の分野でなされてきた。文化人類学では, 主に非西欧社会を対象とし, 性を変える人々を調査してきた。西欧社会で当然視される性の枠組みや制度の問い直すことがその意義であった(池田 2006)。

社会学においては, まず古典である「アグネス論文」(Garfinkel 1967)が挙げられる。Harold Garfinkel は, 出生時に男とされたが自分は女であると主張するアグネスという人物の語りから, 女であることは女で「ある」ことではなく, 女で「あり続ける」ことであると記述した。Garfinkel は性別について, 「正常な性別をもった人間とは, それぞれの社会における文化的な出来事なのである。そして, 成員の認知およびその認知を生み出す実践によって, その文化的出来事の実際の活動における目に見える秩序という性格が生まれるのである」(Garfinkel 1967=1987: 293)と述べる。以降, 医療社会学における「病理」や「逸脱」としての分析が中心になされるが, 1990年代以降はセクシュアルマイノリティ運動の高まりと共に, セクシュアリティ研究の一環として多彩な研究がなされている(杉浦 2001, 鶴田 2003, 2004, 2005, 有蘭 2004)。

精神医学では, DSM (精神障害の診断と統計の手引き, アメリカ精神医学会), ICD (疾病及び関連保健問題の国際統計分類, 世界保健機構), 「性同一性障害に関する答申と提言」(日本精神神経学会 性同一性障害に関する特別委員会)において, 「性同一性障害」の診断基準や治療ガイドラインを提示してきた。ここでは「性同一性障害」は, トランスジェンダーの一部を医療的に指し示す言葉として使われる。こうした医学的領域では, トランスジェンダー

は“心の性”と体の性が食い違う「患者」であり、“心の性”を矯正することが不可能なために、体の性を変えて男女どちらかに一致させる「治療」が目標とされる。

脳生理学の分野では、トランスジェンダーが何故「正常な」女(男)の体に女(男)の心を持って生まれなかったのかを探る研究が多くなされている。新井康允は、胎児期にアンドロゲンの作用にさらされた男の脳と、さらされなかった女の脳の違いが、ジェンダーアイデンティティの形成過程に関わると主張する(新井 2002)。また米沢泉美は、インターセックスの発生原理を援用したホルモンシャワー説を紹介している(米沢編 2003)。これらの説明は、“心の性”はすなわち“脳の性”によると主張している。

ところで、ジェンダーアイデンティティ、すなわち“心の性”について、筆者の参加するセクシュアルマイノリティサークルのトランスジェンダー部会で次のような反応があった。セクソロジストであり『心に性別はあるのか～性同一性障害のよりよい理解とケアのために～』の筆者である中村美亜を招いて、読書会を行った際のことである。中村の“心の性”についての主張は、「ジェンダー・アイデンティティは、自律した自分をもつことを要求される文化において作られた一種のフィクションではないかと思う。その最たるものが、『心にも性別があり、それが男か女か先天的に決定される』という言説である」(中村 2005: 95)というものである。

ジェンダーアイデンティティの非本質性についてのこの主張は、サークル参加者の一部に、戸惑いと共に批判的に受け止められた(G-FRONT 関西編 2006)。その内容は、「自分は心と体の性の不一致のために苦しんでいる。心に性別がないとしたら、どのように自分の苦痛を説明するのか」というものであった。「トランスジェンダーは“心の性”と体の性の不一致に悩んでいる——翻って、ネイティブ<sup>(3)</sup>はそれが一致しているから悩む必要がなく意識することもない」とする主張には、“心の性”が「ある」という前提が存在する。その前提は真実だろうか。こうした疑問から、本論を始めたいと考える。

まず2章で、“心の性”を含む性別についての日常の知の様相と、その解釈を述べる。次に3章で、インタビュー調査の概要を述べる。4章ではインタビュー対象者の語りを中心に、様々なセクシュアリティを生きる人々の語りから、我々の社会の性の構造を明らかにする。最後に5章で、性の構造の相対性、恣意性、変更可能性についてまとめる。

## 2. “心の性”の語られ方

### 2.1 性別についての日常の知

現在トランスジェンダー当事者のみならず、広く一般的に社会に受容されているのは、精神医学的説明と脳生理学的説明であろう。両者は共に、肉体だけではなく心にも性別があり、心の性別はすなわち脳の性別であり、それは変えることができない、と主張する。こうした“心

の性”を前提にすることによって、トランスジェンダーは異性装者や服装倒錯者と区別され、〈科学的に〉「変態」ではなく「障害者」であるとみなされる。

こうした〈科学的〉説明とリンクするようなトランスジェンダー当事者の語りは、しばしば見られるものである。FTM トランスセクシュアルである虎井まさ衛は、「私の心は、私が心らしきものを持った時には、すでに『男』であった。『女』であったのは、脳以外の肉体と書類の上だけのことなのである。『女から男になったワタシ』は、『女体から男体になった私』なのだ。心は元から『女』ではなかったのだから」（虎井 1996：27）と語る。

虎井の語りに端的に表れているように、多くのトランスジェンダーと呼ばれる人々にとって、ある性別に〈なる〉というのは、ネイティブに与えられた不本意な表現であると思われる。自分は完全に間違いなく自然に女／男で〈ある〉というのが多くのトランスジェンダーの実感であり、しかも多くのネイティブの実感であり、日常の知である。

こうした日常の知、すなわち「女／男という二つの性別があり、決定されていて普遍である」という性別二元論を裏切らないために、精神医学的、脳生理学的説明や、上記に挙げたようなトランスジェンダー当事者の主張は、社会に受け入れやすいと考えられる。しかし後に述べるように、“心の性”を持たない、あるいは“心の性”がわからない人々は実態として存在する。そういった人々の語りが可視化されないのは何故か。可視化されないことに意味はあるのだろうか。

## 2.2 “心の性”とホモソーシャル理論

この事態を、Eve K. Sedgwick のホモソーシャル理論より解釈したい。Sedgwick はホモソーシャル理論において、ホモフォビアとミソジニーを特徴とした男性同士の親密で強い連帯関係があり、男性同性愛者と女性を排除しながら男性異性愛者だけで閉鎖的な関係が築かれると主張した（Sedgwick 1985）。

この理論から解釈すると、男性性を確立するには、“心の性”に基づいて性アイデンティティを建てるが必要になる。性アイデンティティが不在であれば、男女の別を前提とした性別役割分業も異性愛主義も成立し得ない。男性にとっては、相手が男性なら「男同士の絆」を結び、相手が女性なら性愛の対象になるためである。

相手の性別がどちらでもなかったり変化したりすることは、こうした構造にとって脅威になる。このことから、社会的に“心の性”が存在するという前提は必要であると考えられる。体の性の二分化と共に“心の性”も二分化しなければ、男性中心社会は不協和を起こすのである<sup>(4)</sup>。医学的認識は、このような社会的な価値観から支えられていると考えることも可能であろう。

では、上記のような社会の中で「いないとされている」、 “心の性”がない、あるいはわからない人々は、現状の社会の中でどのような体験をし、どのようなストーリーを持ち、何者とし

て生活しているのだろうか。

### 3. 調査概要

筆者は2000年より、関西を中心とした複数のセクシュアルマイノリティのサークルやイベントに参加している。調査の対象はそれらのネットワークで出会った個人である。実施期間は2007年6月である。性別に関わるエピソードを自由に語ってもらう形でインタビューを行った。1回につき1~3時間、計3回行い、同意を得て録音している。また基本的に調査者と対象者の2名で行ったが、対象者の友人が同席するなどして話を聞くこともあった。インタビューデータに関しては、内容に差し障りのない範囲で一部変更している。

I：対象者A（以下Aさん）：20代後半。女性として生育してきた。トランスジェンダーとして現在も講演、執筆活動などを行っている。1999年からセクシュアルマイノリティの自助グループで活動している。「性同一性障害に関する答申と提言」にあるガイドラインに乗らない自由診療にて、乳房除去手術を受けている。現在まで戸籍名での就学、就職を果たしている。今後男性ホルモン注射を行う可能性がある。現在の自分の性別は「その他」。

II：対象者B（以下Bさん）：20代前半。女性として生育してきた。過去にトランスジェンダーとして講演などを行ったことがある。大学生時代は女子学生として登録されていたものの、髪を短くし、通称名を用い、男子学生として就学、アルバイトもしていた。ホルモン注射、性別再適合手術は希望していない。現在は髪を伸ばし、戸籍名を用いて女性として就職している。現在の自分の性別は「わからない」。

今回調査した対象者は、トランスジェンダーと呼ばれる人々を代表する事例ではない。彼らは自分の性別が女／男のどちらであるとも述べていない。また「かつて現在と違う性別で生まれ生活していたことがある」ことを公にせず、ネイティブの女／男として生活する埋没<sup>(5)</sup>系の人々とも、生活のスタイルを異にする。

### 4. 語りから見える性の構造

ここでは対象者のインタビュー結果と平行して、トランスジェンダーを中心とした様々なセクシュアリティの人々の語りに表れる、性別観の具体的な例を挙げておきたい。トランスジェンダーが性を語るのには「性別に向き合わざるを得ない者として、むしろ必然かもしれない」(ROS編2007:36)が、トランスジェンダー当事者以外の語りにも勿論、我々の社会における画一的な、あるいは多様な「性のストーリー」が表現されると思われる。

#### 4.1 女とは誰か、男とは誰か——性器についての認識

トランスジェンダーの生活史に頻繁に登場するのが、自分の性器への不全感である。「幼い頃、自分にもペニスが生えてくると信じていた」という語りは、FTM トランスジェンダーには〈典型的〉である。先に挙げた虎井は自叙伝の中で、「大きくなっていくにしたがって、オチンチンが生えてきて、男体になっていくものだ、とずっと小さいころから、これといった理由もなく思い始めていたんです」（虎井・宇佐美 1997：19）と語る。また井上裕も、「確かに僕も一時期は自分の脳がほんとに男性で、ひょっとしたら停留睪丸で、実は明日になったら（ペニスが）生えてくんねんって思ってた人間やから」（G-FRON 関西編 2000 b：97）と述べる。

これらの弁に象徴されるような「ペニスがある者が男性である」という認識は、「ヴァギナがある者が女性である」という認識と表裏一体となる性器主義の表れであろう。このような認識は、トランスジェンダーに特殊なものではない。しかし、性器の形状と性別との関係についての認識を、我々はいづれ獲得するのだろうか。それは〈自然に〉身に付くものなのだろうか。本稿では「トランスジェンダー」の語りからそれを検討したい。

#### 4.2 女とは誰か、男とは誰か——経験・文化

次に、性器の形状に拠らず「性別」について言及する人々の語りを見てみたい。フェミニストである北原みのりは、「フェミニズムは『オンナである』当事者性を大切にするが、その中に MTF は入っているのか？ その中に FTM は入らないのか」（北原 2006）という議論の中で、「女とは誰か」の問いに対して、「マンコを持っていようがいまいが。オンナに見えようが見えまいが。『オンナ』であることは、『オンナという体験』だ」（北原 2006）と応える。

また桂容子は、ネイティブの女性でありながら女性に適応しようと努力した幼少期を語り、現在の性自認について、「私は性自認というレベルでは、『政治的に女性である』ということを引き受けようと考えています。（中略）私も女カテゴリー、男カテゴリーの無根拠性を言ってきました。でもそうすると、『私を女として意味付けるものは何なのか』って考えた時にね、おっぱいがあることや性器が云々でもない。じゃ『なんで私は女なのか』って考えていくと、『私が女として扱われてワリを食ってきたこの体験しかないか』って思ったんですよ。私がこれまで女として生きてきて、『お前は女だ』と言われてこうむってきたいろんな抑圧や差別という経験。それが私を女たらしめているのか、と考えました」（G-FRONT 関西編 2000 b：90）と述べる。

北原や桂の言う「女」とは、多分に政治的戦略的な意味合いを含むものであろう。性自認がいかなるものであれ、女性としての「体験」によって「女性カテゴリー」で生かされている自己への気づきが、「実感としての性自認」と「社会的な性別」とが別の次元に属することを明らかにする。FTM 系トランスジェンダーである田中玲もまた、「女である」とことと「女とし

て位置付けられる」ことの間に距離を見出し、性別違和感を抱えながらも、社会的・政治的に「女」であることを自覚した上で、自分とは異なる「性別違和感を持たない『女たち』」との共闘可能性を示す(田中 2006)。

Aさんは自身の性自認と、「女である／ない」ことを以下のように語る。

根本的に女だね、って言われた時、少なくとも女ではない、何か他のものって感じ。(その時言う「女」ってどういうもの?)一般的な社会が言う漠然とした「女」。(ジェンダー化されたまったく二つしかない区切り?)そうそうそうそう。特に何も考えていないそこらへんに歩いてるヘテロ男女の、セクシュアリティの「セ」の字もわからず、男と女しか世の中にはいないと思ってる人の「男」とか「女」とかいうレベルの話で、「女ではない」。(「女ではない」と言う時その「女」は取替えが利くものではなく、本質的に女ではない?)女の時もあるよ。それは概念によるよね。一般的な「女」というものに回収されないために女ではないって言ってる感じ。一般的に流布してる「男」とか「女」とかに、漠然としたものに回収されないために言ってるから、社会的に女でしょって言われたら「あ、そうです」って言うし、今まで生まれて育てられてきた時は女で扱われてきたし。育てが女でしょって言われたら「はい、女です」って言う感じ。それはそうだね。そういう概念しかない中で育ってきて、それが女だって言われることは全然構わない。

Aさんは自身を「女ではない他のもの」と感じながら、女として生育してきた過去を自覚的、肯定的に捉えている。黙っていれば「男と女しか世の中にはいない」と思われる社会において、女でも男でもない自分の存在を主張することはすなわち、自分が「一般的な『女』」に回収されない」ことの表明でもある。Aさんもまた、「女ではない他のものという性自認」と、「社会的に女性として育成してきた自分」を異なった位相で捉えている。

しかし多くの場合、トランスジェンダーにとって性自認と異なる性別で生きた「体験」は、苦痛であり否定すべきものとして語られる。次項でそうした語りについて記述する。

#### 4.3 「体験」の語り方

トランスジェンダーに〈典型的〉なエピソードのひとつに、幼少期における自分の性別への違和感と、反対の性別への憧れを示すものがある。MTF トランスジェンダーならば、「スカートを穿きたかった」「青よりピンクが好きだった」、FTM トランスジェンダーならば、「ぬいぐるみより電車のおもちゃを欲しがる子どもだった」「男の子みたいにやんちゃで活発で外で遊んでいた」、など(虎井 1996, G-FRONT 関西編 2000 a, b, 2002, ROS 編 2007)。

それらは多くのトランスジェンダーに共通する体験のようである。こうしたエピソードの中には、既に「スカートは女性が穿くもの」「男の子はやんちゃで活発で外で遊び、女の子はお

となしく室内で遊ぶもの」「ぬいぐるみは女の子が欲しがるもので、電車のおもちゃは男の子が欲しがるもの」「男の子には青、女の子にはピンク」といった、様々な性別に関わる前提が内包されている。

Aさんは家族旅行で海に行った際、女兒用の水着を着せられた時に感じた違和感を、しばしば講演などで取り上げて語っている。

（なんで女兒用の水着は自分に合わないと思った？）なんでだろうね。その時だからと言って、男とか、それは絶対に女で、自分の位置は男だっていう相対的な認識があったわけじゃない。やっぱり「それは」違うってということだけしかわからなかっただけ。だから今つながってるのは、女ではない、だったら男かっていうわけでもない。その根本的なところはつながってると思いますね。それではない、だけど何かはわからないけど。（代替物を想定していたのではなく、とりあえずその水着は私のものじゃないと）そうそうそう。

性器の形状と性別を関連付けることと同様、我々はいつこうした認識を獲得するのだろうか。脳に性別があり、脳の性が“心の性”であり、“心の性”に従って〈自然に〉反対の性での振る舞いを拒否するのだろうか。

たかぎはあるFTMトランスジェンダーに、笑顔で写っている自分の幼少期の写真を見せたところ、「俺はお前みたいに演技をしていなかったから、子どもの頃の写真では笑っていない」と評され、「自分が演技していたように見えた」ことに驚いたという（ROS 編 2007）。そしてFTMトランスジェンダーとして「語るべきもの」と「語れないもの」について、「FtMは自分の女である部分、女としての過去を否定しようとする傾向がある。『スカートが嫌だった』、『水泳が嫌でしかたなかった』と『言わなければならない』雰囲気があった。もし『昔は自分のことを女だと思っていた』などと言えば、『お前はおかしい』と言われかねない雰囲気があった」（ROS 編 2007：92）と述べる。

トランスジェンダーが「過去にこのような経験をした」と語ることは、単に過去に起こった出来事を提示するだけではない。「性別は生まれた時から一貫しており不変である」とする言説空間において、「過去に自分は女／男として経験した」ことは、そのまま「現在の自分も女／男である」ことの証明である。「過去に女／男であった」ことは、「過去から現在に至るまでずっと女／男である」ことに他ならない。そして過去と現在の性別に一貫性が見られないことはとても言いづらいことであり、一貫性があるように「言わなければならない」のである。

#### 4.4 意味を付与される身体

トランスジェンダーは与えられた性役割を拒否する。それは服装や立ち振る舞いとどまらず、しばしば外科的に身体の形状をも変更する。外科的な処置は身体違和、すなわち自分の思



う自分の性別と自分の身体的特徴が食い違うことの違和感,「自分の体は間違っている」という感覚を解消するために行われる。

Aさんは乳房除去手術の経験についてこのように語る。

(乳房除去について, 当時と現在, どう思う?) 今はね, やっぱり別に取らなくても良かったと思うんだけど。うん, 全然。取らなくても良かったけど, 取った方が断然, 取った姿の方が好きだから, 取って良かったなと思ってる。でも取らないとわからないじゃん, そんな。でも少なくともいらんわ。(今の自分の方がカッコいい?) カッコよくはないけども, 前よりは好きな形してる。(形が気に入らなかった?) そうだね。形に付随してる意味だよ。意味に耐えられなかったんだと思う。すごいなんか, 象徴的だったんじゃないかな, 私の中で女性性みたいな。安易なイメージだったんよね, 自分の中で。それに耐えられなかったんだと思うけども。やっぱり生物学的には全然取らなくても生きていける生物だったと思うんだけど, 意味があるじゃん, 社会的に生きていくって。こういう社会で私の好きな形で, 胸という意味がなくなった体で生きていくことに意味がある, みたいな感じだったんだと思う。(女性性の象徴でなければ?) 取らなくても良かったと思う。

Aさんにとって乳房は「女性性の象徴」であった。そして社会の中で乳房に与えられた「意味」が「女性性の象徴」でなければ, 「取らなくても良かった」のだ。

たかぎは, 社会によって身体は意味を与えられ, その与えられた意味を嫌悪することが身体違和であると説明する (ROS 編 2007)。トランスジェンダーの身体への嫌悪感は, 「性」的な「意味」への嫌悪として捉えることができるのである。身体が「性」的な「意味」の集合であり, その「意味」が変化すれば——例えば乳房が女性の象徴ではなく, 髭が男性の象徴でなければ——トランスジェンダーはそもそも乳房や髭に違和感を示すことはないだろう。

社会によって身体に意味が与えられていること, 与えられた意味を自分で選び直すこと, 社会における身体の意味そのものを変えること。トランスジェンダーの体験からは, こうした作業を意識することが可能になる。

#### 4.5 性別の変遷と「女」「男」への不適合感

トランスジェンダーが自分史を語る時, 女/男のどちらに属しているかの確信を表明すること, 過去と現在の性別の一貫性が求められることは既に述べた通りである。ここでは B さんへのインタビューから, 女で, あるいは男で生きようとするある個人の体験を, 時間軸に沿って記述したい。

Bさんは高校までの期間を女子として生活してきた。しかし「うまく女子をできない」た

めに、「男子をやってみよう」と考え、男子学生として大学に通うことにする。「うまく女子をできなかった」ことについて、Bさんは以下のように述べている。

FTMの集まりに行くと、よく「お前はいいよな」って言われて。背が高かったり声が低かったり胸がそんなに目立たなかったり。何の話題にしても「お前はいいよな」って言われる気がして。そういうのも嫌だったし、私はこんなものとても欲しくないと思ったし。本来なら低くないんだよ。女子時代はほんま低い声が嫌やったし。なんかわざと高い、高めの声の練習とかも。女子に当てはまらないってのがうまく女子をできないっていう理由でもあったから。そういう背も含めて、でかい、足もでかい、声がかわいくないとか。それまで嫌だと思ってた部分が急に羨まれる対象になって、単純に羨まれても喜べないって言うか。

Bさんにとって「うまく女子をできない」理由のひとつは、「女子に当てはまらない」ことであった。高い身長、低い声、目立たない胸などは、「女子に当てはまらない」否定的な要素であった。しかし男子学生として大学に通い始めたBさんは、必ずしも自分を男子だったとは考えていない。

その辺りは終始自分がなんなのかわからなくてどっち付かずだったと思ってたから。どっち付かずだからどっちかに入りたくて、でもずっと女子をやろうとして無理、しんどいと思ったから、じゃあ男子の方はどうだろうと思ってやってみようと思った。当時は自分がどっち付かずだと思ったし、どっちかに入りたかったし入らなきゃいけないと思ってたの。

「女子をできなかったから男子をやってみた」とBさんは言う。「女か男のどちらかに入らなきゃいけないと思っていた」から「男子をやってみた」のであって、確固たる「男」の性自認を持っていたのではなかった。そのことが男子での生活を始めてからのBさんに違和感をもたらす。

FTMって、いろんなことを「女はこうだよな、男はこうだよな」って言って、自分が男に属するような、自分はこういうところがあるから男に属するみたいな。やたら女は男はって話をする。そういうのを聞いても嫌だったし。野郎臭いって言うか、GID路線で、雰囲気は「俺は」。だからサークルとか行っても、FTMになれない自分とかすごくしんどくて、いっそのことFTMになってしまえばいいじゃないかと思って、それでホルモンしようと思って、ホルモンしてしまえばもっと自分のことを男だと思えるように

なるかも知れないとか考えて。

「自分は **FTM** になれない」, 「男だと思えるようになりたかった」 **B** さんは, **FTM** トランスジェンダーの友人との間にギャップを感じ, その後関係を疎遠にしていったと言う。その後 **B** さんの認識は変化していく。

ある時期からアイデンティティと言うか, 私の中で私を表現する時に, あまり人には言ったりはしないんだけど, 私の中で「私は **FTM** ではない」っていうのが私の認識になったのね。じゃあなんだったって言われたら言えないけど, こんなナリをしてるが, しかし **FTM** ではないっていうことで, 私の中で私を表現する時期になったのよ。それが私の中で画期的で。はっきり **FTM** ではないと思って。まずそう変わって。そう変わったのが大きいかも知れないね。まあ **FTM** ではないならじゃあなんなんだったってなるけど, まあ別にいいじゃないかみたいになって, とりあえず私は **FTM** ではないんだみたいな, その段階。んでその **FTM** ではないっていう段階からもうちょっと時間経ったら, わからないままでもいいじゃないか, になったのかな。

男子として生活しながら, ある時期に「はっきり **FTM** ではない」という認識を得た **B** さんは, かと言って「女」とも「男」とも「わからないままでもいいじゃないか」と考えるようになる。

**B** さんには, 多くのトランスジェンダーが語る「どちらの性に属しているかの確信」や「一貫した性自認」は見られない。**B** さんにあるのは「わからなくてもいい」という確信, そして4.6で記述するように, 自分は「女」も「男」も「やれるんだ」という自信である。

#### 4.6 性別を演出する

**A** さんは世間一般の性別観を強く意識しながら, 自身の性別については, 以下のように語る。

(あなたの今の性別観は?) やっぱり社会の産物, 文化の産物って感じ。(あなたの性別は?) 生物学的には女だと思うよ。メスだと思う。まんこがついて, 膣があるしね, 生理があるしね, 胸があったしね。文化的にも女だと思う。女で育ってきてるしね。ずっと疎外感があったけど, 疎外感があったにしろ結局女文化の端っこには位置付けられてたから, 入れ込まれてたから, 文化的にも女だと思うし, 文化に女っていうことは, 行動様式が女だと思う。多分仕草とか動き方とかも女っぽいんだと思う, どちらかと言うと。そういう社会的なルールに基づいて言うならね。自分の中で言ったらそれこそ無性。無宗教な

んですみたいな感じ。ノンポリなんです。どっちでもないし、概念がなんか玩具。楽しむためのあえての性別って感じ。コスプレか？ そうだね、コスプレに近いね。(自分の中身とは関係なく？) 中身と連動してるよ。坊主頭にしてるからと言って心がボーイッシュになってるかと言うとそうではなくて、心が全然いろんなものになり得る。いろんなふうな格好がしたい。いろんなものになれると思ってるからいろんな格好をするっていう感じだから。そういう意味で男になったり女になったりする。それはもうあくまで演出と言うか気分を楽しむと言うか。

Aさんは性別を「社会の産物、文化の産物」であり、「楽しむためのあえての性別」として捉えている。そして「社会のルールに基づいて言えば」自分は「女」とであると述べる。しかし自分自身は「無性」であり「無宗教」だと言う。性別を「宗教」になぞらえ、「男になったり女になったりする」ことを演出するのは、例えば無宗教であっても、チャペルで結婚式を挙げ、神に愛を誓う行為に似ているかも知れない。ウェディングドレスという「コスチュームプレイ」と同じく、「女」や「男」を「プレイする」という性別観が、ここでは主張されている。

Bさんは自分にとっての性別を、「粹」という言葉を用いて説明する。

(あなたの性別とは？) いろんな粹があって、私がぼーんぼーんとあちこち行ってる感じ。(「私」には性別はある？) 私は生まれは女子、育ちも女子。(女子粹？) 女子粹だね。女子粹に生まれて女子粹に育って、でも私がそうとは限らない。(あなたにとっての性別は？) 粹だね。いろんな粹に入って試してきた、ほんとそんな感覚。私は女子粹というものがあって、そこに行けない自分という状態をちっちゃい頃から抱えてて、それをちょっとぼーんと男子粹的なところに行ってみて、今度は女子粹に来てみて、っていう感じ。昔できなかったことを今の私にはできるかも知れないって行ってみた、結構できた、みたいな。今の自分ならできるかも知れないって気分になったのです。男子にぱっと行けた私なら、女子にぼんに行くこともできるかもって。多分聞く人が聞いたら「はあ？」って感じやろうけどね。だってあんた女子やん、って言われたら。だって私が男子へぼんって行くのと、私がそれと同じようなぼーんと言き方なただけど、だってあんた女子やん、って思う人に見てみたら、私が男子になることと私が女子でいることって、私にとっては同じようなことなただけど、「はあ？」って思うんじゃない？ 自分にとってはどっちもぼーんぼーんと言き行ってるだけだから。ぼーんと言けると言うか、ぼーんと言く動作が、言き方と言うか、同じ幅みたいな。そこまでの言き方は同じ。多分人からすると、女子までに幅があるのかというのわからない人もいるんだろうし、それが男子まで行く幅と同じなんてこともわからないんだろうし。でも私にとってはそうなんだよ。

Bさんは「女子枠に生まれて育った」が、しかし「私がそう（＝女子）とは限らない」と言う。そしてBさんにとっては、「女子枠」へ行くことも「男子枠」へ行くことも「同じ幅」,「同じやり方」なのである。実際にBさんは大学生時代を男子学生として過ごし、就職以降を女性として過ごすようになった。そのきっかけについて、Bさんは次のように語る。

ある友人と喋ってたことがあって、その友人と私は紙一重な感じがして、でも向こうは女やってて、こっちは男やってるなって雰囲気。(どの辺が?) 女子との不適合感。喋ってて、「女になれるだろう」と思ってたこととか。あとサークル参加者の人もそうなんだけど、それなりに各自世間で言う女子像からぼろぼろこぼれてるのに、女子の枠のままでいる人達。女子やってる感で言うか、その枠の中に、範疇にいる人達を認識するようになってきて、そういう人達のどの部分が女子とされる枠からこぼれてて、しかし大枠で言ったら女子の中にいるなっていうのを認識、そういう意識で見えて、「だったら私もそうであれたな」みたいな。何も男子にならなくても、なんかそういう知り合いと対比して私を考えたりして。「私も女子でいれたな」と思うし。なんか段々私が男子でいる必要がわかんなくなってきた。

「女子とされる枠」からはみ出しながら「女をやっている」人達との出会いによって、Bさんは「私も別に男子にならなくても女子でいられた」と感じるようになる。そして就職の少し前に、「久し振りに女子をやった」体験について以下のように語る。

大学卒業年に、女性中心のイベントに行ってみたら、そういうことに興味持って来てくれる人ってということで先入観を与えたのかも知れないけど、女子と思われたのね。ものすごい久し振りに女子だと思われて、結構髪の毛伸ばし気味で、服装も前ほどではなく中性的を心掛けた、でもまだメンズの服だったけど、そんな服装で行ったから女子だと思われて。なんかすごい新鮮で面白かったね。久し振りに女性と思われて。(嫌ではなかった?) ドキドキわくわくした。それこそ初めに男子でトランスした、あれほど超ドキドキ感はなかったけど、ああ、うまくできてるっていうわくわく感。うまく女子できてるなー、みたいな。その時女子でいられる、いたかったから、尚更すごいそういうのが良かったし。

Bさんが「わくわくした」のは、「うまく女子をできている」ためであった。Bさんにとって「女子」や「男子」は「である (be)」ものではなく、「する (play)」ものなのである。

#### 4.7 性別という言葉

Aさんは性別を宗教に例え、以下のように「性別を信じていない」と語る。

逆に言うともうでもいいわけよ、その人達の一般的なレベルで言われてるような男がどうだとか女は女らしいとか。男は男だとか女は女らしいとか、遠い世界。そういう見方してる時点で私と全然次元が違うから。私は私のことを男とか女の物差しで計れないと思ってるから。（自分の思ってることとは別に性別がある？）性別とか信じてない感じ。ばらばらの事象としてある感じ。社会的なルールと言うか、常識と言うか、文化？ 流行？ 流行とか文化とか信仰とか、そういう無形のものの中のひとつ。それに乗るか乗らないか、って全然違うじゃん。流行に乗らない選択をしてるのね。性別とか信じてないって言うか。だってキリスト教文化の中でさ、十字架とか踏んだら「ぎゃー」って言われるやん、みんなに。だけどキリスト教文化じゃないところで踏んだところでさ、「あ、何か踏んでるで」って感じやん。それと同じことかなと思うけどね。だからすごい真面目なクリスチャンだと思われたいんだったら、その文化に乗っ取ってそのルールに乗っからないとダメなんじゃない、その社会では。（男女のベクトル<sup>(6)</sup>で自分を表すのは大変ではないか？）ああ、あんなの適当だよ。世の中に合わせてやってんだから。（方略としてで、自分にふさわしく表してるわけではない？）無理無理、あんな指標で表現できるわけないから、人間を、セクシュアリティを。ほんとと便宜上。世の中のルールに乗っかってる人がセクシュアリティの多様性を知るきっかけにするための道具だから。全然あんなの信じてない。例えば俳句とかさ、そういうのを説明する時にさ、日本語じゃないと説明できなかったりするやん。日本語についてここがいい悪いって言う時も、日本語でやった方が一番わかりやすいやん。それと同じ感じよね。日本語を全然信じてないし日本語は嫌いだし普段全然使わないけど、日本語を使ってる人にそれを伝えるためには日本語使うしかないみたいだね。普段はクィア<sup>(7)</sup>星人でクィア語を使ってるけど、クィア語で言っても日本語の人には通じないから日本語に訳し直してやってるって感じ。

ここで言われる「真面目なクリスチャン」を「本当の女／男」に置き換えると、「本当の女／男」であると思われたいなら、「本当の女／男」の「ルールに乗って」いかなければならないと述べられている。キリスト教文化の中で「十字架を踏んだら」問題になるように、性別二元論社会において「本当の女／男」であることは、性別を絶対視し、性別の自然さを守ることである。“心の性”があると主張するトランスジェンダーの性別観は、このルールに則ったものであると言える。

そこでAさんは、「男女の物差しで計れない」自分をあえて〈性別の言語〉に「訳し直して」、言葉のわからない人々、すなわち性別という言葉扱う人に伝わるように言語化してい

ると主張する。

Aさんは性別を「宗教」や「流行」のように考え、信じない、乗らない選択をしていると言う。そして性別を「コスプレ」や「演出」するものとした上で、自分を「無性」だと述べている。Bさんは性別を「粹」という言葉によって言語化し、「女」「男」のどちらの「粹」に入るか、あるいは入らないか、あるいはその他の「粹」を用意するかという選択可能性の中で、自分は「粹」を自由に行き来するものとして考えている。

AさんとBさんに共通するのは、絶対的・本質的であるとされる「女」と「男」の性別二元論という性の構造を無化する志向性を持つことである。Aさんはある所属集団においては、性別に拠らないコミュニケーションに基づいた人間関係、社会関係を作っている。Bさんは個人的な関係の中では、自分の性別がわからないまままで過ごしている。

しかし生活する上で、Aさんは時には「世の中に合わせて」〈性別の言語〉を用いて自分を説明する。Bさんは自身の認識に関わらず、男子として就学し、女性として就職している。AさんもBさんも、社会の中で常に「性別」から降りた、「性別」のわからない自身を表現するわけではない。状況や立場や文脈を十分に理解し考慮するために、生活のある部分を「社会のルール」に合わせているのである。こうした行動は、性別を前提とされた社会において生き抜く知恵であろう。

## 5. 終 章

セクシュアルマイノリティのサークルに参加しながら筆者が見聞きしたトランスジェンダーの行動は、時に呆れるほど性的に過剰であった。FTM トランスジェンダーは「男らしく」粗暴に振る舞い、MTF トランスジェンダーは「女らしく」無力を装っているように見えた。しかし調査の中で浮かび上がってきた人々は、単に「ジェンダー」(性別)を「トランス」(移行する)存在ではない。彼らは性別そのものを飛び越え、性別のない自身を認識し、性別の文化性を意識し、性別を生きない選択をも含めて、性別の内と外に自らの居場所を見出している。

このような人々をトランスジェンダーと呼べるのだろうか。〈性別の言語〉を用いればそれは可能かも知れない。しかし彼らの生は、性別を軸にのみ語れるものではない。むしろ性別を軸に語ることは、彼らの言語を侵すことになるだろう。

これに対し、心にも性別があり、“心の性”に沿うように生きたいと願い行動するトランスジェンダーの語りは、実感であり実体験でありながら同時に、性の一貫性を求める言説空間において、「トランスジェンダーとして」語らされているとも言えるのである。

そうした“心の性”は、ジェンダーアイデンティティとして認識されるために実体化されがちである。しかし実は曖昧であったり、変化し続けたり、なくなったりするような、流動性を持つものである。事実性としての“心の性”はフィクションであり、言語の反復によって行為

遂行的（パフォーマティヴ）に生産されているものに過ぎない。故に、「心にも性がある」と主張することもまた、〈性別の言語〉を用いたパフォーマンスである。

フェミニズムによって、「女」や「男」の本質性を主張する言説は打破された。ジェンダーの概念は性の文化性を明らかにし、我々に「性の本質主義」への抵抗の手段を与えたと言える。そしてトランスジェンダーについての研究は、ひとつは「女／男であること」の実践による達成を明らかにし、一方で“心の性”言説を立ち上げた。また近年のセクシュアルマイノリティ運動の中で、「性の多様性」は繰り返し主張されている。これらは〈性別の言語〉によって自らを知ることを可能にした言説である。

性は多様化した。しかしそれは「性」を説明する語彙が増えたのみであった。「性」によって捉えることのできない人々——性を無化する人々——は其中で語ることができない。あるいは、「性」によって捉えられない人々を社会は〈性別の言語〉で何とか説明しようとし、同時に彼らも〈性別の言語〉を用いて社会に合わせて自分を説明することがある。何故このように確固とした圧力でもって、性別は我々の社会に君臨するのであろうか。

“心の性”があるとする主張が何故我々の社会に受け入れやすいか。2章でこのことを Sedgwick のホモソーシャル理論から解釈した。男性のアイデンティティを立てることで、ホモソーシャルな関係とミソジニーは形を成す。アイデンティティにもとづく男女の別を前提として、性別役割分業と異性愛主義が成立する。男性中心社会において男性が支配的であるために、性別は必要とされるのである。性別を求めるのは生殖器でも脳でも心でもない。男性中心社会がその構造のために希求するのである。

フェミニズムもセクシュアルマイノリティ運動も、性別という男性中心社会の言説の中で展開されてきた。それは性別によって抑圧される存在にとって必然の課題であっただろう。女性も男性もトランスジェンダーもその中に取り込まれているが、しかし同時に、性別という男性中心社会の言説に乗らない「トランスジェンダー」が、理念上も実際にも存在する。

「性」によって捉えられない、性別を無化する「トランスジェンダー」の存在は、故に男性中心社会の普遍性と不変性を否定する。同時に男性中心社会を脱した社会の可能性を提示する。男性中心社会に変化を迫ることが性別カテゴリーにゆらぎをもたらし、性別カテゴリーを拒否することが男性中心社会を変容させる潜在的発展性を秘めている。

ここでは男性中心社会が普遍的に広く認められることの理由を問うことはしない。筆者はこの稿で、男性中心社会が現存し、その中で性別がかくも重大なファクターとして機能していることを確認する。それによって抑圧される人々の存在を示すこと、男性中心社会の解体可能性を示唆することを、視点の中心に置きたいと考える。

性別がこのように根源的である社会において、性別を否定した上で現在と異なる社会を想定することはどのようにして可能だろうか。意識的、理念的な達成の道筋もあるだろう。また既に公に構成される集団内において、書類や名札からの性別欄の撤廃、制服制度の廃止、呼称の



統一などが図られている実態がある。このような実践の結果から、代替的社会の達成可能性を予期することができるのではないだろうか。

今回示されたトピックの個別の内容について今後より詳細に研究し、それら個別の事象をつなぎ再び社会の構造を明らかにする作業を行いたいと考える。そこから現行の男性中心社会を脱性別化——結果的に再性別化することもあり得るだろうが——する方法を模索したい。

〔注〕

- (1) 医療の対象になる「トランスセクシュアル」に当てはまらない人々を指して、対語のように「トランスヴェスタイト **Transvestite, TV**」は使われてきた。原語は「衣服を変える人」であり、「異性装者」とも訳される。
- (2) こうした3分類は、「医療の診断基準により当てはまるものがより本物でありより重篤である」という階層意識を生み、「トランスセクシュアル>トランスジェンダー>トランスヴェスタイト」といった格付けを生むことになった(米沢編 2003)。こうした状況から、「トランスヴェスタイト」当事者が、その否定的な意味合いを拒否するために、「クロスドレッサー **Cross Dresser, CD**」という言葉を用いることがある(米沢編 2003)。
- (3) 生まれ生育してきた性別と性自認が合致しており、違和感を持たない人々。**Native**。
- (4) これは同時にインターセックス(半陰陽者)への抑圧としても機能していると考えられる。
- (5) トランスジェンダーである人が、性別を変えた後、生まれ生育してきた性別を明らかにせず、「ネイティブの女/男」として社会生活を送ること。
- (6) Aさんは講演活動の中で、「女」と「男」を両端にした身体の性・性自認・社会的な性・性指向の4つのベクトルを用いて、性の多次元性を説明している。
- (7) 原語は「変態」の意。主にセクシュアルマイノリティを指す蔑称であったが、セクシュアルマイノリティ運動の中で、当事者が自らを肯定的に称する言葉として用いられるようになった。**Queer**。

〔引用文献〕

- 新井康允, 2002, 「脳の違いがジェンダー・アイデンティティの形成過程にかかわる」, 『AERA Mook ジェンダーがわかる.』, 朝日新聞社。
- 有蘭真代, 2004, 「物語を生きたということー「性同一性障害」者の生活史からー」, 『ソシオロジ』49-1, 150号, 55-71。
- Butler Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge. (=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』, 青土社.)
- Califa Patrik, 1997, *Sex Changes: The Politics of Transgenderism*, Cleis Press. (=2005, 石倉由・吉池祥子・レズビアン小説翻訳ワークショップ訳『セックス・チェンジズ トランスジェンダーの政治学』, 作品社.)
- Garfinkel Harold, 1967, *Studies in ethnomethodology*, Blackwell Pub. (=1987, 山田富秋訳『エスノメソドロジー 社会学的思考の解体』, せりか書房)。
- G-FRONT 関西, 2000 a, 「ぼこあぼこ vol. 15 上巻 性別というもの, こと」, 機関誌。
- , 2000 b, 「ぼこあぼこ vol. 15 下巻 性別というもの, こと」, 機関誌。
- , 2006, 「UP&UP 144号」, ニュースレター。
- 池田瑞恵, 2006, 「「性」を変えるー現代日本における性同一性障害モデルの普及とトランスジェンダーの経験ー」, 京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化人類学分野 2005年度修士論文。

- 北原みのり, 2006, 「LPC Weekly オンナとは誰か」(<http://www.lovepiececlub.com/kitahara/archives/000699.html>, 2008. 12. 11).
- 松尾寿子, 1997, 『トランスジェンダリズム 性別の彼岸』, 世織書房.
- 中村美亜, 2005, 『心に性別はあるのか? ~性同一性障害のよりよい理解とケアのために~』, 医療文化社.
- 日本精神神経学会 性同一性障害に関する特別委員会, 1997, 「性同一性障害に関する答申と提言」, 『精神神経学雑誌』 99(7), 533-40.
- ROS~Rockdom of Sexuality~, 2005, 『ROS Mook トランスがわかりません!!』, 機関誌.
- , 2007, 『トランスがわかりません!! ゆらぎのセクシュアリティ考』, アットワークス.
- Sedgwick K. Eve, 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press. (=2001, 上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』, 名古屋大学出版会.)
- 杉浦郁子, 2001, 「「性の自己認知 gender identity」の社会的構築—「性同一性障害」をめぐる医学的言説において—」, 『中央大学文学部社会科学紀要』 11 号, 89-11.
- 田中玲, 2006, 『トランスジェンダー・フェミニズム』, インパクト出版会.
- 虎井まさ衛, 1996, 『女から男になったワタシ』, 青弓社.
- 虎井まさ衛・宇佐美恵子, 1997, 『ある性転換者の記録』, 青弓社.
- 鶴田幸恵, 2003, 「「心の性」を見るという実践—「性同一性障害」の「精神療法」における性別カテゴリー—」, 『年報社会学論集』 16 号, 114-125.
- , 2004, 「トランスジェンダーのパッシング実践と社会学的説明の齟齬—カテゴリーの一瞥による判断と帰納的判断—」, 『ソシオロジ』 49-2, 151 号, 21-36.
- , 2007, 「女／男であるための方法—トランスジェンダー・性同一性障害のエスノグラフィー—」, 東京都立大学大学院社会科学部研究科社会学専攻 2006 年度博士論文.
- 好井裕明編, 2005, 『繋がりと排除の社会学』, 明石書店.
- 吉永みち子, 2000, 『性同一性障害—性転換の朝』, 集英社.
- 米沢泉美編, 2003, 『トランスジェンダリズム宣言—性別の自己決定権と多様な性の肯定』, 社会批評社.

(いわた いのうえ みく 社会学研究科社会学専攻修士課程修了)

(指導: 近藤 敏夫 教授)

2008 年 9 月 30 日受理